

ては本症は慢性期においても、手術後であっても大動脈破裂や再発により突然死する可能性があることをよく説明し、家庭で急に病状が悪化した場合の病院や救急施設への連絡法を決めておくよう指示する。

文献

- 1) Miller DC: Acute aortic dissection; Current management guidelines. 脈管学 29: 837-840, 1989
- 2) Masuda Y, Yamada Z, Morooka N, et al: Prognosis of patients with medically treated aortic dissections. Circulation 84 (suppl III): III 7-13, 1991

書評

木村 健(監訳) 谷口 友志・佐藤 貴一(訳)

ヘリコバクター・ピロリ感染症

竹本 忠良(東京女子医科大学成人医学センター)

1994年2月、NIHがだした消化性潰瘍に対する*H. pylori*の除菌の勧告声明は、わが国に大きな衝撃を与えた。それまでは、多くの製薬メーカーが躊躇していた*H. pylori*除菌による再発防止の治験も、にわかに現実のものとなりつつある。胃癌との関連が濃厚であるとなれば、マスメディア・国民の関心も極めて高くなるのも当然のこと。

最近では、消化器の学会や研究会でも、*H. pylori*会場はむねに満席だ。製薬メーカーの講演会でも特別講演の主題が*H. pylori*だと、必ず大入り満員となる。現について先日のことであるが、木村健教授が「ヘリコバクター・ピロリと胃炎」という題で、某ホテルで特別講演したときも、1,000名を超える入場者があって、インターフェロンの登場の前夜を思わせるような熱気がこの列島に渦巻いていることを証明した。

木村教授監訳のこの本の存在をすでに知って参加された開業医家も多かっただろうと、これは当方の勝手な想像。まさに、日本もいま*H. pylori*ブーム、治験ブームが到来した現在、この訳書の刊行は極めてタイミングがよい。また、日本消化器病学会としても、英語力にすぐれ、*H. pylori*研究でも知られた自治医大木村一門の労作を大いに歓迎したい。

つい先月のこと、大分医科大学の藤岡利生助教授にみせてもらったが、彼はさすがに*H. pylori*の最先端の研究者だから、*H. pylori*の本をすべて集めていて、すでにモノグラフも数冊ぐらい刊行されてい

るようだ。1993年に刊行され、原稿締め切り後5か月以内に刊行されたもいうこのKluwer Academic Publishersの本は、今でももっとも適した*H. pylori*の入門書である。原著で17章、178頁、訳本でも206頁の薄い本だから、読みやすく、しかも現在世界の*H. pylori*研究をリードする一流人の分担執筆だから、*H. pylori*の大概のことは知ることができて、実用性が極めて高い。

この洋書は私もすぐ購入して、かなり読んでいたが、このたび木村教授監訳の本書を、まるで中学生の虎の巻のように、対照して読んでみたが、うまく訳してあることに感心した。たとえば、tight junctionは「癒着帯(tight junction)」、Graham教授独特の用語‘cystitis of the stomach’は「胃胃炎」と苦心の訳だ。しかもかつこ内に原文がつけてあるので、訳された意味を考えるのも面白いだろう。

10月15日が第1版第1刷とあるが、訳者のうちの何人かは、その直前にあったロサンゼルスの世界消化器病学会の私の「*H. pylori*と腺境界」の特別講演の手伝いもしてくれていた頃で、仙台の日本消化器病学会大会までに、ぜひこの訳書を発刊しようと、当時の自治医大消化器内科はまさに大車輪であっただろう。若さと情熱というものは、短期間でもって、かくも見事な仕事を仕上げるものと痛く感服した次第である。

(A5判 224頁 4,120円(税込) 1994年 医学書院刊)